

旭川美術館の「木の造形」と 「NATURE&ART 木をめぐる美術」展

北海道立旭川美術館 学芸員 門 間 仁 史



■美術館の個性

北海道内に5館ある道立の美術館に、それぞれ個性があることはご存じでしょうか。美術館の個性はその館が設置される際に定められた理念によって決まりますが、なかでも重要なのが収集方針、すなわち、どのような作品を収蔵し、保存・研究・展示するかという基本的な指針です。これに従って作品が収集され、所蔵作品群（コレクション）が形成されて、美術館の個性が形づくられてゆきます。

道立にかぎらず、一般に日本各地の公立美術館は、その地域の美術にとって重要な役割を果たした作家や、地域にゆかりのある作家の作品を収集することを第一の方針としています。作品によって地域の美術の歴史を跡づけ、未来に向けて紡ぎ上げてゆくことこそが、他ならぬ美術館の重要なミッションであるからです。しかしその一方で、地域における重要性とは関係なしに、価値のある作品を広く収集して市民の鑑賞に供し普及を図ることも、美術館に求められる役割であることに間違いありません。

そこで、地域との直接的なつながり以外の要素を根拠に、体系立てて作品を収集するための第二の方針が立てられます。ただし、この場合も地域とのつながりがまったく考慮されないわけではなく、多くは風土や産業などの地域特性から導き出された間接的なつながりに依拠して定められます。例えば札幌の道立近代美術館は全部で五つの収集方針を定めていますが、そのうちの第四の方針である「ガラス工芸」は、透明な輝きをもつ雪を想起させて北海道の美術館のコレクションに相応しいという理由から定められました。他にも、函館美術館は、著名な書家・金子鵬亭を輩出したことから「書」を、帯広美術館は農業が盛んな十勝平野にちなみ「農村風景」を、釧路芸術館は広大な湿原や世界自然遺産となった知床など豊かな自然に取り囲まれていることから「自然」を、それぞれ収集方針のひとつとしています。

こうした方針に従って収集された作品が、繰り返し展示され、繰り返し鑑賞されることで、美術館の個性

が確立されてゆくことになります。

■「道北の美術」と「木の造形」

では、旭川美術館の収集方針、ひいては個性がどのようなものかと言うと、「道北の美術」と「木の造形」の二本柱がそれにあたります。



「道北の美術」と「木の造形」を収集する旭川美術館。
建築設計は故・田上義也氏。

北海道第二の都市であり、道北の中核都市である旭川は、札幌を除けば、比較的早くから美術運動が発達した地域です。1916（大正5）年頃には高橋北修（1898～1978）と関兵衛（せきひょうえ 1901～1991）という二人の画家がヌタックカムシュッペ画会（※「ヌタックカムシュッペ」はアイヌ語で「大雪山」の意）を結成して美術運動の端緒を開き、以来、純生美術会や新ロマン派美術協会などの運動が今日まで絶えることなく続いて、この地域固有の美術の歴史を築いてきました。旭川美術館では、こうした歴史を記録し、未来に向けて発展的に継承してゆくために、旭川を中心とする「道北の美術」の収集を第一の方針と定めています。

第二の方針である「木の造形」については、本誌の読者の皆様には説明が不要かもしれません。よく知られているとおり、旭川とその周辺地域では木工業が盛んです。歴史的に見れば、明治後期に至るまでの旭川の木工は、豊富な森林資源を活かした製材

業とマッチの軸木のような一次加工のみの木材加工業が中心で、高度な加工技術を要する木工業は他地域と比較すると未発達でした。そうした状況を打破すべく、大正期に入ると、官費による積極的な人材の育成が図られ始めます。1915（大正4）年から1917（大正6）年にかけて各年開設された木工芸伝習所では、洋家具や漆芸の技術指導が行われ、延べ60名以上の職人が参加しています。その間、旭川の木工品の生産額は十倍近くにまで増加し、またたく間に主要産業のひとつとして成長しました。品質への評価も飛躍的に向上し、道内各地から注文が殺到して、生産が需要に追いつかないほどであったといいます。今日人気を博している「旭川家具」の出発です。

こうした地域の産業史を反映させたのが、旭川美術館の「木の造形」という収集方針です。美術館としてあらゆる木の造形物に見いだされる美的要素を網羅すべく、下記のような広い範囲を射程としています。

- ・対象は工芸から美術まで
- ・地域は旭川に限らず日本全国
- ・時代は伝統工芸の礎が築かれた近代から、最先端の表現が展開される現代まで

これによって、木という素材の魅力と、木によって育まれてきた多彩な技術や表現を体系的に展観するという、木の街・旭川に相応しい美術館の個性が形づくられているわけです。

■「NATURE&ART 木をめぐる美術」展をめぐって

本年11月から開催の「NATURE&ART 木をめぐる美術」展は、木を自然から与えられた恵みとして捉え、それに美術という方法によっていかに関わってきたのかを検証することで、自然と人間との関係を再考しようという、非常に力のこもった企画です。北海道150年という節目の事業として、「木をめぐる美術」に焦点を当てた展覧会を旭川美術館で開催することの必然性は、これまで述べてきた内容から、ご理解いただけるでしょうか。

本展は、2016年の4月から基本構想の検討がはじまり、約2年半をかけて実施される、比較的準備期間の長い展覧会と言えます。ただし当初の担当が2018年4月に異動となったため、入れ替わりで当館に配属となった私が跡を継いで、現在（10月24日時点）、開会に向けて準備を進めています。

展覧会の準備で最も重要な仕事は、出品作品の確定

です。予算と日程、そして展示室という空間の制約を考慮しつつ、展覧会の基本構想にかない、質が高く、なおかつ観覧者に満足していただける数の作品を選ぶことは、容易ではありません。さらに選んだ作品を並べる順番や、展示の意図をわかりやすく伝えるためのコーナー分け、作品を効果的に見せる設置方法や照明の当て方、作品と併置する解説の内容にいたるまで、付随して考えるべきことは無数にあります。これらをうまく組み立てて、いかに魅力ある展示空間を作り出すかが、その展覧会の成否を左右します。



チラシなどの広報印刷物の作成も重要な仕事のひとつ。見た目に美しく、かつ展覧会のコンセプトと出品作品、関連事業などの情報をわかりやすく伝えるデザインであることが求められます。

本展に関して言えば、基本構想の策定までは前任者が終えていたため、私に残された作業は、まさにその出品作品の確定でした。通常、この二つの仕事は不可分で、構想を練りつつ作品を選び、作品に検討を加えながら、さらに構想を推敲してゆきます。

ただし公立館の場合は、事業計画や予算計画の関係で構想だけを先に決めなければならないこともままあります。また急な人事により、構想だけが決まり作品が決まっていない展覧会を、他の学芸員に引き継がなければならなくなることも、しばしば起こりえます。

いずれにせよ厄介なのは、基本構想と作品を、それぞれ別の人が考えなければならない事態に陥ることです。他の人が考えた構想をもとに具体的な内容を後付けで考えてゆくことがいかに難しいかは、言うまでもないことでしょう。

幸いなことに本展は、構想の初期段階から所蔵作品を中心に構成することが確定していたために、「木の造形」に分類される作品のなかから目玉となる数点を

ピックアップしてストーリーを組み立てれば、おのずと形になることがわかっていました。とは言え所蔵点数は「木の造形」だけでも200点以上にもなります。その組み合わせは無限にあると言っても過言ではありません。

結論から言えば、生活用具を作るところから始まって、技術、遊び心、表現への欲求が高まるにつれて芸術表現へと至るといふ、人と木との接し方の変化をストーリーとして示すことが本展に相応しいと判断しました。そうすることで、工芸から美術まで幅広い範囲で設定されている当館の「木の造形」の特徴を十全に活かせると考えたためです。

全体としては三部構成として、伝統的な技と高いデザイン性が融合した木工芸の作品から、戦後美術のなかで木を素材とした作品、そしてよりコンセプチュアルでありながら原初的な「彫る」という行為に回帰しつつある現代木彫の作品まで、約40点を選定して展示を構成することにしました。



出品作品から

(左)須田桑翠《黒柿小筆筒》1979年

(右)舟越桂《午後にはガンター・グローヴにいる》1988年
展示室には伝統工芸と現代木彫が混在します。

■展覧会の目玉 砂澤ビッキ

一点だけ、出品作の確定にあたって前提条件があったとするならば、砂澤ビッキ(1931-89)を重点的に紹介しなければならないということでした。砂澤は旭川出身で、晩年を道北の音威子府村で過ごした木彫家です。豊かな自然のなかで、巨木を用いたダイナミックな作品を制作。全国的にも高く評価されており、道内各地の美術館が作品を所蔵しています。それらの中から代表的な作品を借り集め、当館所蔵の砂澤の作品とともに一つのコーナーを設けて展示するというのが前任者の構想にあったのです。砂澤は「道北の美術」

と「木の造形」の二つの方針にまたがる旭川美術館にとって最も重要な作家のひとりです。「NATURE & ART」展で砂澤を取り上げることは当然の発想でしょう。

これは私にとって好ましい条件でもありました。砂澤は工芸家としての側面と美術家としての側面を併せ持つことから、私が思い描いた展示構想のなかでも、工芸と美術の橋渡しの立ち位置で、重要な役割を果たしてくれるに違いなかったからです。展示の三部構成のうち、第一部を工芸、第三部を現代木彫として、中間の第二部を砂澤の紹介に当てることで構想が固まりました。この制約がなければ、構想にもう少し手を焼いていたかもしれません。

すでに各地の美術館から作品を借りるための準備が進められていました。美術館が他の美術館から作品を借りることは、珍しいことではありません。展覧会の意義が理解され、展示や他館への貸し出し予定とのダブルブッキングがなく、なおかつ作品の状態が良好であれば、出品交渉自体は比較的容易に進めることができます。問題なのは輸送とそれに伴う諸々の調整です。

美術品の輸送は、美術品の取り扱いに習熟した専門の作業員を擁する専門業者によって、空調機器を完備し振動対策を施された美術品専用車両(通称:美専車)を使って行われます。そこで、まずはこの輸送業者を決定することになります。

輸送業者が決まれば、次に輸送方法を検討します。言うまでもないことですが、美術品は非常にデリケートで、わずかな温湿度の変化、振動や衝撃によって破損しかねません。古代の仏像や建築が現存していることからわかるとおり、木は美術品の素材としては比較的強靱な部類に入ります。しかし、とりわけ乾燥が大敵で、亀裂のような原型を損なう深刻な被害を起こしかねません。一般に作品を管理する湿度は55%±3%程度が理想とされますが、作品がもともと置かれていた環境と同等であることが望ましい場合もあります。そのため、作品の状態や保存環境を吟味しつつ、安定した湿度下での輸送が絶対条件となります。

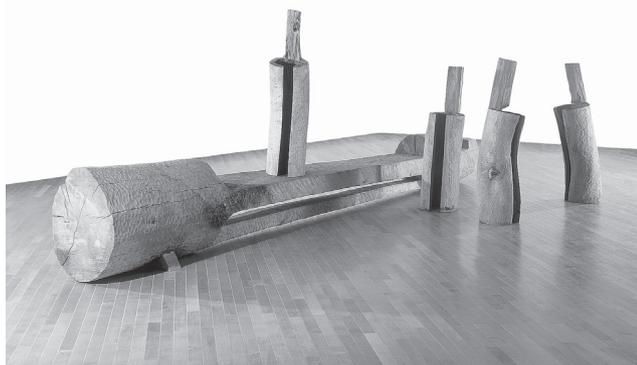
また、木を素材とした作品に独特の問題として、シロアリやシバンムシといった木を食害する文化財害虫による生物被害があります。これを防ぐために、外界との接触は可能な限り避けなければなりません。閉鎖された環境での作業を徹底し、必要と判断されれば、薬品燻蒸や脱酸(密閉容器内で低酸素状態におく)によって殺虫処理を施す場合もあります。

砂澤の巨木を用いた作品ともなると、重量やサイズも障害となってきます。大きな作品では単体での重量で数百キロ。人力ではどうも持ち上げることができませんので、リフトなどの重機を手配します。作品の形状によっては絵画などの輸送に用いられる美専車では作品が取りまきらないため、より大型の車両も手配しておかなければなりません。

もちろん、ただ単に美専車に作品を積むわけではなく、輸送中に作品にがたつきが生じたり、余計な振動や負荷が加わったりしないように、一点一点を緩衝材で養生して梱包し、厳重に固定します。このあたりは実際に作業にあたる作業員の経験に負うところが大きく、密に打合せを重ねながら、最善の方法を探ることになります。

このように美術品の輸送に際しては、作品の特性を吟味し、あらゆるリスクを想定して、方法を決定していきます。大きな労力と長い時間がかかる仕事と言わざるを得ません。

しかしそうした困難を乗り越えて展示するだけの魅力が、砂澤の作品にはあります。ダイナミックでありながら繊細。作品の表面を埋め尽くす細かな鑿(のみ)跡からは、巨木と向き合い、魂を込めて鑿をふるった砂澤の姿が浮かび上がってくるようです。是非実際の作品を間近で見て、その魅力を感じていただきたいと思います。



砂澤ビッキ《風に聴く》1986年 札幌芸術の森美術館蔵
横たえられている部分はアカエゾマツの一木造り。
長さは6mを越える。

■おわりに

砂澤ビッキの作品に限らず、木の造形にはなんとも言えない魅力があります。ぬくもりを感じさせる地肌、美しい木目、ほのかな芳香など、作品として完成されても木本来が持つ素材の特性が消え去ることはありません。そこから感じられるのは、やはり木の生命

感。一個の生命体としてあった木の、姿形を変えてもなお余韻のように響く生命感こそ、他ならぬ木の造形の魅力なのです。入手や加工の容易さ以上に、今日に至るまで多くの工芸家や美術家が木を素材に選んできた理由も、ここにあるに違いありません。

ただし、その魅力はひとつの葛藤を生みます。すなわち、作品に残された余韻をそのまま響かせ続けるか、やがて消えてゆくにまかせるかという葛藤です。美術館の立場としては基本的に前者を選択します。優れた作品を健全な状態で保存し、将来にわたって鑑賞に供することが美術館の最も基本的な使命であるからです。他方、作家のなかには後者を選ぶ者もいます。例えば砂澤は、「生きているものが衰退し、崩壊してゆくのは至極自然」なこととして、「風雪という名の鑿」が自身の作品を倒壊させることをも受け入れていました。

月並みながら、どちらが正しく、どちらが間違っていると断じることはできません。あるいは、これらふたつの立場に板挟みになりながら、いつまでも迷い、葛藤し、木の造形といかに向き合っただけでなく、問い続けることが、私たち学芸員の宿命であるようにも思われます。

これからも迷い、葛藤しながら、ひとつでも多くの優れた木の造形を、皆様にご紹介できるよう努力してまいります。ぜひ美術館に足をお運びいただき、ご鑑賞いただければ幸いです。最後となりましたが、この度、執筆の機会をくださいました北海道林産技術普及協会に、この場を借りてお礼申し上げます。

展覧会情報

北海道150年事業／アートギャラリー北海道
NATURE&ART 木をめぐる美術

会 期:2018年11月14日(水)～2019年1月14日(月・祝)
休 館 日:月曜日(ただし12/24, 1/14をのぞく)
12/25, 12/29～1/3

開館時間:午前9時30分～午後5時

観 覧 料:一般800円, 高大生500円, 小中生300円

会 場:北海道立旭川美術館 第1展示室

URL:<http://www.dokyoji.pref.hokkaido.lg.jp/hk/abj/top/htm>

お問い合わせ:

北海道立旭川美術館

〒070-0044 旭川市常磐公園内

TEL:0166-25-2577 / FAX:0166-25-2539